



スーパー グローバル ハイスクール

佐高 SGH通信 2019

No.13 (2019年 9月5日発行)

SGHクラブの活動レポート

SGH福島フィールドワーク

夏休み中、8月4日(日)から5日(月)にかけて、SGHクラブ国内班(1年14名)が福島県双葉郡およびいわき市でフィールドワークに取り組みました。テーマは「震災からの復興と今後の取り組み」についてです。以下に概要を報告します。

第1日 8月4日

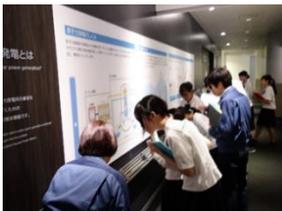
《Jヴィレッジ》

常磐道広野ICを降り、広野町にあるJヴィレッジにまず立ち寄りしました。駐車場でバスを降りると鮮やかな芝のグラウンドで地元の学生チームがラグビーの試合をしているのが目に飛びこみました。ここはついこの間まで原発事故の対応拠点で資材置き場であったことが想像できないほど綺麗に整備されていました。



《東京電力廃炉資料館》

富岡町に入り、東電が原子力事故と廃炉の現状を確認する場として設置した廃炉資料館を訪れました。最初の展示物は3.11・時のオブジェ。時計型のオブジェに地震や津波の被害状況が映像と共に流れる展示に震災当時小学1年生だったクラブ員は皆、かすかな記憶を呼び起こすべく食い入るように見入っていました。続いてシアターホールにて時系列で事故とその後の対応を振り返る映像を視聴し、最後に流された視聴者へのお詫びの言葉と決意が耳に残りました。



《第4回福島第一廃炉国際フォーラム》

続いて午後から富岡町文化交流センター学びの森にて開催されたイベントに参加しました。福島第1廃炉と未来について話し合う目的で、被災各地を巡りながら毎年開催されている本フォーラムですが、

同時通訳の入った会場では東電・経済産業省などの関係者、海外有識者と共に地元の高校生4名が登壇し質問していました。その勇姿に一同、大いに刺激を受けました。



第2日 8月5日

《ふたば未来学園高等学校》

同じSGH校であるふたば未来学園高等学校を訪問し、教頭先生より学校を案内してもらいました。採光に配慮した階段教室、シアター、活動スペースなどを見学し、一同この学校で過ごしたいとの声をあげていました。自らと社会の「変革者たれ」という教育目標のもと、地域の課題を探求し、演劇として発表する等特色ある教育活動を展開しており、地に足のついた実践であることに感銘を受けました。



《久ノ浜防潮堤》

いわき市に入り久ノ浜地区へ。復興商店街から3分歩くと、巨大な防潮堤と太平洋が目飛びこんできました。市内では防潮堤が27kmに渡るそうです。穏やかな海を眺めながら、防災・減災、自然・人間…等、様々なことを考えさせられました。



《豊間地区集会所にて》

海岸線を南下していくと、有名な塩屋岬灯台が迫り、灯台を過ぎ丘を越えると美しい豊間海岸が現れました。事前研修で被災当時のすさまじい状況の写真を見ていた我々は、しばしこの美しい海岸を取り戻すまでの地元の方のご苦勞に想いを馳せました。

集会所に入り、FW研修のハイライトと位置づけていた被災復興の現状と課題を当事者の方々から聴くランチミーティングを行いました。まず、クラブ員が事前研究した内容についてプレゼンテーションをしましたが、その発表態度は皆堂々としており、好評でした。

- ・本校概要（岡田さん）
- ・SGHとしての取組（根本さん）
- ・原子力発電に代わる発電方法は何か？（エネルギー班）
- ・災害に強いまちづくり（まちづくり班）
- ・東日本大震災時における海外援助（ひと・グローバル班）
- ・教育者・澤井氏に迫る（ひと・グローバル班）

プレゼン後、2名の方に話を伺いました。まず今回お世話になった元いわき市立湯本第二中学校長澤井史郎先生から「避難所を体育館でなく、各教室にするという信念を貫いたこと、自閉症の子どもに避難所で過ごしてもらおうことができなかつた後悔、「協働・共同・協同」について、市民としての子どもたちを育てるという思いが震災後、更に強くなり、様々なボランティア活動に生徒とともに汗を流したこと」を話していただきました。続いて地元の牧師さんである五十嵐義隆氏より「真のグローバルリーダーとは」と題して、田中正造の真の文明について、人権・多様性を認めることこそグローバルリーダーの資質である等、含蓄に富んだお話をすべて英語でお話いただきました。

限られた時間ながらも被災復興慰霊碑の立つ地で実際に被害に遭われた方々から本質に迫るお話を拝聴し、クラブ員は今後の研究活動への意欲をかき立てられました。



《小名浜地区》

最後にいわきの南の玄関であり、港と「アクアマリンふくしま」など観光スポットを要し、大型ショッピングモールもある小名浜地区を見学しました。周辺は工業地帯でメガソーラーが設置されており、事前研修で代替エネルギーについて調べたクラブ員は車窓から熱心に見ていました。

研修全体を通し、事前研修ではわからなかった様々な現実に触れ、今後の新たな研究課題をつかむことができたことが最大の収穫となりました。



～研究員の感想（抜粋）～

- フォーラムで登壇していた高校生は自分たちと比べものにならないほどたくさんのことを考えていて、多くの学ぶべき点があった。（1-3 大山 時生）
- 現地では高校生への期待の大きさを実感した。同時にSDGsの目標である「私たちが地球を救える最後の世代である」という言葉を思い出し、これからの未来を担う私たちが震災からの復興を含めた様々な問題を解決していくのだという未来への希望と責任を感じる研修であった。（1-1 中島 碧）
- 震災を体験した方々と我々の間には問題意識において大きな差があることを実感した。今後、意識の差を埋めることこそ大切であることを強く感じた。（1-4 岡田 沙也加）
- フォーラムを見学し、実際の課題に対し、意見をぶつけ合い解決の糸口を探ることの重要性がわかった。我々の間でもディスカッションを継続的に行いながら研究を深めていきたい。（1-2 八田 愛李）
- 地域に根ざした研究がいかに大切であるか、若者への期待を随所で感じた。（1-1 岡田 萌花）
- 現地の人と話すこと、現地の人の話を聴くことが何より必要ということがわかった。現地の方々から未来について前向きな姿勢で話し合われていることに驚き、印象に残った。（1-1 船渡川 実優）